

なぜ 英語が話せないの

〈19〉

ここに第一期研修生の報告書がある。
「生まれて初めて外国人に接した。一日八時間近くも英語を聞く生活を続けていると、最初の数週間は日本人が話しているのを聞いても英語に聞こえないうることを決定。二泊三日の日程ながら、講師と英語劇をしたり、夜間、酒を酌み交わすうち、外国人恐怖症も薄れた。」

意志が強くない限り、これほど集中的には勉強できない。「最初は音楽のようにしか聞かされた講義の話が二十日、一月とたつうちに次第に意味を持つ言葉になり、その喜びは感動的であったなど書いている。」

外人恐怖症なくす

教師たち 合宿で英会話に自信

「話す」はどうか。八人ぐわいのグループを編成すると、内気な先生はなかなかしゃべろうとしない。そこで最も基礎的訓練を要するグループは三人とし、毎回プリントを用意し、会話力の増進に全力を挙げた。

「各講師は、英語教師に最初はブロークンでも話させて、正しい英語に直していく。これで教師たちは億せず活発に話すようになった」と福田教授は話す。

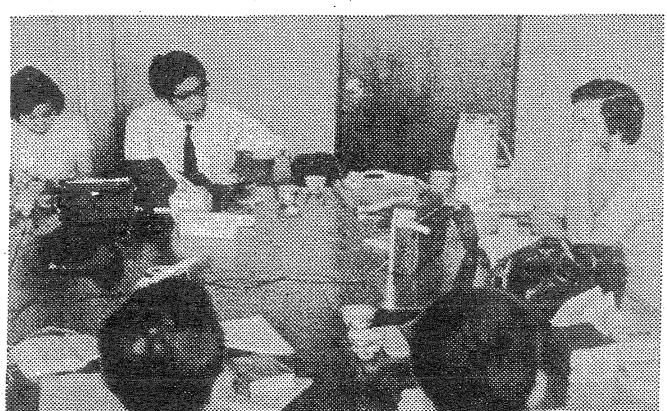
最初の一年間で九十八人が集中訓練に参加。年間百人研修という目標は達成された。

昭和四十五年九月四日。この日はわが国の英語教育史上、画期的な一日だった。熊本県下で始まった全国初の中、高校英語教師の再教育プログラムである「教員集中訓練計画」（略称「TC」）がスタート。その開講式が熊本市水前寺共済会館で開かれた。

式には研修生（英語教師）十七人と外人講師三人、県英語教育振興会や県教育庁関係者らが出席。研修生は、十七人のうち十三人が中老教師。年齢は二十三歳から四十歳まで。平均年齢三十三歳。女性教師二人。講師

陣は、日本で英語教育の経験を保持フレンダ・ポーツさん（ベニシルベニア大英米文学科博士）、「イングリッシュ・九〇」の、午後は各講師の工夫で、授業時間は、午前八時四十分、変化に富む応用授業がなされた。始まり、終了は午後四時四十分。た。

指導の中心は英語を話すための「た」。英語教師たちは必死であった。昼間、クタクタにすごかれ、帰宅するとテープで英語を聞く毎日。宿題、レポート提出も義務づけられた。主催者側の一人、



外人講師（右端）から英会話を熱心に学ぶ先生たち